

4. 縄文時代の夜明け

見学の重点

このコーナーでは、旧石器時代から縄文時代への道具の変化を示しています。

- ①縄文時代になると、狩りに使う道具はどのように変化したでしょう。
- ②現在発見されている山梨県で最も古い土器は、いつ頃作られたのでしょうか。
- ③縄文時代にはどのような料理の方法が加わったでしょう。展示品を参考に考えてみましょう。

今からおよそ1万5千年前から2千3百年前までの約1万年間を縄文時代といいます。土器という容器が新たに作られ、弓矢で狩猟を行い、ムラでは家族が竪穴住居に住み、周囲の山林で木の実やワラビ・クズなどの採集や、ヒョウタンやマメなどの簡単な栽培も行っていた時代です。

縄文時代の人々はひきつづき石器を使う生活をしていました。しかし、旧石器時代とは違った石器を使っていました。縄文時代草創期には、両面をきれいに薄く加工した有舌尖頭器などの石槍が使われていますが、早期になった1万年前頃からほとんどみられなくなります。かわって弓矢の先に付けた石鏃がたくさん使われるようになります。石を打ちかいて作る打製石器は石鏃のほかに、石錐、石匙、打製石斧などがあります。石錐は道具や衣類をつくるため穴をあける道具です。石匙はナイフとして使われました。石を磨いて作る磨製石器は、磨製石斧をはじめ、石皿、石棒、耳飾りなど種類が豊富になります。また、木の実などを叩いたり磨りつぶすための、磨石、敲石、クボミ石などがたくさん使われるようになります。

弓矢は縄文時代に発明され、狩りに大きな力を発揮するようになります。弓矢はねらったところに素早く力強く命中します。弓矢が使用されるようになった背景には、自然環境の温暖化により発達した豊かな森の中での狩りが中心となったことと、狩りの対象がシカやイノシシなどの中型動物とノウサギなどの小型動物に変わったことがあります。おそらく、森から中小動物を追い出して獣道に出てきたところを、急所を確実にねらって狩りする方法として編み出されたものなのでしょう。なお、縄文時代からは狩りに犬も使いはじめていたようです。

縄文時代の最大の特徴は、人々が粘土を焼いて容器を作ることの覚え、使用するようになったことです。縄文土器という名は、この時代の土器に縄目の模様が多く用いられることに由来しています。人々は煮炊き用の土器の発明によって、今まで食べられなかったものを食料品のレシピのなかに加えることが可能になりました。生や焼くことでは食べられなかったドングリなどをアク抜き(水で煮て洗みやアクを取り去る)して食べられるようになり、たくさんの量をたやすく手に入れることができ、しかも保存のできる木の実を主食にするようになりました。

現在のところ山梨県で最古の土器は、1万2千年前頃の神取遺跡(北杜市明野町)の微隆起線文土器です。展示では、縄文時代草創期の土器として、1万1千年前頃の中込遺跡(北杜市長坂町)の爪形文土器の破片、1万年前頃で早期ははじめにかけての社口遺跡(北杜市高根町)で発掘された表裏縄文土器の破片などがあります。早期では、8千年前頃の押型文土器、7千年前頃の条痕文土器を展示してあります。



縄文早期の尖底土器



5. 縄文土器の移り変わり

見学の重点

このコーナーでは、県内の遺跡から出土した縄文土器を展示しています。縄文土器は草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に分けて展示しています。

- ①時代によって縄文土器の形や模様が違うことを、土器を見て自分の目で確かめてみましょう。
- ②縄文土器にはどのような形や模様があるでしょう。展示してある土器を観察してみましょう。

縄文時代に使われた土器を総称して縄文土器といますが、すべての土器に縄目模様が付いているわけではありません。地方や時期ごとに文様や形が異なり、独特の特徴をもちます。この時期的な変化をもとに縄文時代は草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に区分されます。

【草創期、早期】(15,000年前～6,500年前)

古い頃の土器はバスケットや革袋をモデルにして作られたといわれ、底が平らなものと丸いものがあります。次第に底が尖る単純な形になっていきます。土器は煮炊きのために使われ、土にさしたり石で支えて置きました。文様には丸い棒に彫刻したものを転がして付けたものや貝殻でこすったもの、縄文などがあり、独特な文様が発達します。

【前期】(6,500年前～5,000年前)

前半期には、早期同様に尖底土器がありますが、後半期になって平底で単純な深鉢形をしたものが多くなります。ソーメンのような細い粘土紐を貼り付けたり、細い竹を縦に割ったヘラでつけた文様が多くなります。煮炊き用の土器の他に、機能が分化して、貯蔵用や盛りつけ用などの浅鉢がはじめて作られるようになります。中には、UFO形と呼ばれる有孔浅鉢形土器のような独特な形をしたものもあります。

【中期】(5,000年前～4,000年前)

山梨県の縄文時代の遺跡は大部分がこの中期に属します。中期前半の様子は半円形のヘラで付けた文様が特徴ですが、中葉頃には人の顔やへび、イノシシなどが描かれた物語性をもつ豪華な文様が出現します。中期後半になると渦巻き文様が中心となります。土器は大型の甕のほかに有孔鏝付土器、浅鉢、器台など特殊な形が増えます。また、土器は煮炊きのみでなく、炉に埋められたり、墓に使われたりと違う用途に転用されるようになります。完全な土器を逆に埋める、埋甕の風習も後半期に出現します。

【後期・晩期】(4,000年前～2,300年前)

人口が急に減り、遺跡も少なくなります。雑なつくりのものが多くなり、精巧なものにわかれます。液体を入れる注口土器や小さくて特殊な形をした祭りに使われるような土器が増えます。文様は山梨独自のものが少なく、東北地方や関東・北陸地方などに影響された文様となります。



深鉢



浅鉢



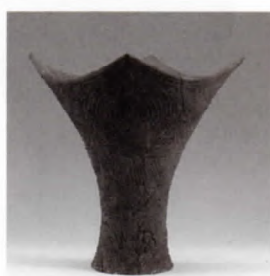
有孔浅鉢



有孔鏝付土器



早期



前期



中期



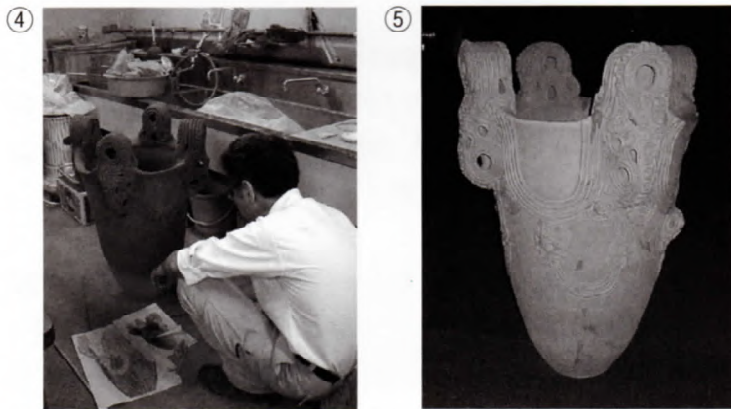
後期



晩期

●縄文土器の作り方

川砂や雲母などの鉱物、時には植物繊維を混ぜ、調整した粘土を用います。円形の底を作り一段ずつ粘土紐を積み上げていく方法が一般的で、ロクロなどは使いません。大型のものや屈曲の強いものは形がくずれないように、何段階かに分けてある程度乾燥させながら積み上げていきます。形ができた段階で文様を付けます。文様は粘土紐を貼り付ける方法と縄を転がしたりヘラで刻んだりする方法がみられますが、さまざまに組み合わせられ、またその順序やタイミングもさまざまです。乾燥後、野焼きします。窯などはいりませんので、700℃から900℃の温度で焼かれます。



甲州市安道寺遺跡の深鉢形土器を作る!!

- ①土器の底をつくる。
- ②粘土紐をつくる。
- ③粘土紐を輪積みして、土器の形をつくる。
(成形)
- ④形ができたなら、土器の模様をつける。(施文)
- ⑤完成。よく乾燥させてから野焼きをする。

5000年前の山梨でダイズの栽培が行われていた!!

縄文時代は、自然の恵みにより生活していた時代で、農耕は縄文時代にはなく、弥生時代からはじまりました。しかし、植物の種をまき、栽培する知識はあったことが分かっています。ヒョウタンやエゴマなどが縄文時代に栽培されていた植物として知られていました。ところが、最近の研究で別の栽培植物が発見されました。酒呑場遺跡(北杜市長坂町)の中期土器の粘土の中に、ダイズの一種が埋め込まれていることが分かりました。研究の結果、縄文時代前期後半から中期後半にかけて、自然種から少しずつ改良して大粒のダイズになるまで、縄文人が品種改良していったことがわかりました。山梨の縄文人が、食物を得るために植物栽培を手がけていたことがわかったのです。ただし、森を開墾して大規模な畑を作っていたのではなく、集落の周りなど、日の当たる場所に少しだけ育てられていたものでしょう。



6. 縄文のムラ

見学の重点

縄文時代のムラを復元し、模型にして展示してあります。隣にある遺跡分布図は、縄文時代の遺跡の位置をビーズで示し、人々がどのような場所で生活していたのかを表しています。

- ①縄文時代には、家はどのように並んでいたでしょう。ムラの復元模型から読み取ってみましょう。
- ②ムラの広場はどのようなことに使われたのでしょうか。

縄文時代中期の集落(ムラ)の様子について、^{しやかどう}釈迦堂遺跡(笛吹市一宮町・甲州市勝沼町)を例に復元してあります。縄文時代前期後半～中期(6～5千年前)になると、大きなムラがあちこちにつくられ、そこを拠点に狩猟や採集活動を行いました。縄文時代前・中期は気候の温暖化がピークを迎え、現在より2～3℃高かったと考えられており、豊かな森が発達して食料が十分確保され、集落は規模を拡大して定住傾向が強まりました。この時代には、イノシシやシカ、木の実などの自然の恵みは、川が氾濫する平地よりも山地の方が豊かだったので、多くのムラは小高い丘の上につくられました。イエがドーナツのように環状に並び、真ん中に広場をつくる環状集落が特徴で、6～7軒で1つのムラをつくりませんが、数百年の積み重ねで数百軒の^{たてあな}竪穴住居による環状集落が発掘されています。広場では、結婚式や葬式、あるいは収穫祭などに人々が集まり、踊りや宴会が催されたことでしょう。また、獲物を分けあったり、共同作業も行われたことでしょう。収穫や狩猟の方法によっては、2～3家族がグループをつくり、遠くの出稼ぎムラに移っていったり、男たちだけで長い狩猟の旅に出たこともあったでしょう。

釈迦堂遺跡は、笛吹市一宮町と甲州市勝沼町の境に広がる縄文時代を中心とした52,000㎡の一大遺跡群で、縄文時代の集落の変遷を知ることができます。中期の集落は前後の時期に比べて規模が大きく、食料採集に適した自然環境の中で人口が増加したと思われます。^{さんこうじんだいら}三口神平地区の中期の集落は、6～7軒の住居が半円状に並び、内側に広場、その広場の一部に^{どこうぼ}土坑墓(縦に穴を掘り遺体を埋めた遺構)が点在していました。集落の外側には土器捨て場がつくられ、周囲はクヌギ、クリ、クルミなどを交えた森でした。環状集落としては、全体像をみることができることで保存された梅ノ木遺跡(北杜市明野町)や、酒呑場遺跡(北杜市長坂町)、^{かぶつぼら}甲ッ原遺跡(北杜市大泉町)などが知られています。また、前期後半の集落遺跡としては、^{はなとりやま}天神遺跡(北杜市大泉町)、花鳥山遺跡(笛吹市)が有名です。



ムラでの暮らしのようす



後・晩期では、環状集落はみられなくなり、イエが何軒かかたまっていたり、列状に並ぶものがみられます。この時期の大きな特徴は、お祭りの場が独立して作られるようになることです。北杜市大泉町の^{きんせい}金生遺跡が典型例です。金生遺跡では、大きな石を持ち込み、円形や方形に並べたり積み上げたりした^{はいせき いこう}配石遺構があり、その中から石棒や^{ちゅうくうどくう}中空土偶などのお祭りの道具が発掘されました。配石遺構の下には、^{せつかんぼ}石棺墓が埋まっているとされ、焼けた人骨なども見つかったことから、葬儀とも関係したお祭りだったようです。

釈迦堂遺跡のムラの様子(復元)

7. 縄文時代の生活

見学の重点

甲斐市金の尾遺跡の約4,500年前の縄文時代の住居跡を復元し、実物大の模型で展示してあります。土器や石器は県内の遺跡から出土したもの、木の柄などは復元したもの、木の実には実際に採取したものです。

- ①縄文時代の人々はどのような家に住んでいたのでしょうか。復元されている建物を観察してみましょう。
- ②縄文時代の人々はどのような道具を使っていたのでしょうか。復元されている建物の中を観察してみましょう。
- ③縄文時代の人々はどのような物を食べていたのでしょうか。復元されている建物の中にある動物や植物から想像してみましょう。

縄文時代の家の模型は、金の尾遺跡(甲斐市)の住居跡を復元したものです。地面を数十cm掘り下げて柱をたて、屋根を覆ったもので、縄文時代の住居とよばれています。この時代、屋根は茅などの草や枝、土、石などを使って葺かれます。復元住居の真ん中にある石で囲った炉(いろり)は、火をたいて家の中を明るくし、食べ物を焼いたり煮たり、体をあたためたりした所です。炉の中にたてられている土器は、食べ物を煮るなべです。磨製石斧は木を伐採したり加工したりする斧です。

狩猟や採集の道具も住居の中に置かれていました。打製石斧は今の鍬やスコップにあたるもので、縄文時代の住居を掘ったり、クズの根やヤマイモなど土の中にある食べ物を掘る道具でした。炉の脇では、母親がクッキーを焼くために、石皿と磨石を使って木の実を粉にしています。炉の上には棚が作られ、その上で木の実や肉を乾燥させて保存食を作っています。他に、神棚のような場所もあったようです。

最近の発掘調査では、縄文時代の住居の他に、掘立柱の建物も見つかっていますから、夏と冬の住み分けがあったかもしれません。また、3,000年程前になると、家の床に石を並べた敷石住居も現れます。



が多かったようですが、丸めて汁に入れたり、焼いて食べることもあったと考えられています。木の実には炭水化物、脂肪や蛋白質がたくさん含まれており、縄文人にとって大切な栄養源だったことでしょう。人々は秋に木の実をたくさん集めて保存し、寒い冬を越すための食べ物としました。酒呑場遺跡(北杜市長坂町)の中期土器の粘土の中には、ダイズ(豆)の一種が埋め込まれていることが分かりました。山梨の縄文人が、食物を得るために植物栽培を手がけていたようです。



縄文人はイノシシやシカなどの動物、キジ・鴨などの鳥、ハマグリやアサリなどの貝や魚、木の実や芽など四季折々のものを中心に食べていました。中でも、木の実など植物質の食料が中心でした。山梨県でも花鳥山遺跡(笛吹市)や水呑場遺跡(市川三郷町)、甲ッ原遺跡(北杜市大泉町)などからクリやクルミ、ドングリなどの炭化したものが発見されています。また、パンやクッキーのような形に作られた炭化した食べ物も見つかっています。この中にはエゴマが多量に入っており、栽培されていた可能性があります。木の実を粉にして粥状にして食べることが



甲ッ原遺跡出土の磨石と石皿

8. 縄文芸術の開花

見学の重点

展示では、甲州市塩山とのぼやし殿林遺跡の深鉢形土器ふかばちがたや、笛吹市境川町一の沢遺跡の国の重要文化財に指定された多数の土器が展示してあります。縄文時代の優れた造形美術を代表する出土品です。

①縄文中期の土器の大きさや形、文様は、他の時期の土器と比べて、どのようなものがあるでしょうか。特に豪華な装飾や文様の様子を見比べてみましょう。

山梨県内の縄文遺跡から、華やかな縄文土器がたくさん出土しています。縄文時代前期後半頃から、遺跡数が急激に増加しはじめ、中期には遺跡数のピークとなりますが、その間の土器は縄文芸術と呼ぶにふさわしい、優美な土器の形や文様があらわれます。殿林遺跡(甲州市塩山)では、ハープのような文様が特徴の、中期後半の大きな土器があります。口が大きく開き、肩が張り、腰から下がスマートにすぼまる、均整のとれた形です。形や文様が優美に洗練されており、アメリカ、フランス、イタリアなど、世界各地で展示され、概説書などにも写真が載っています。一の沢遺跡(笛吹市境川町)では、角のように突き出た4本の装飾が特徴の、中期中葉の土器があります。口は大きく開き内側にせり出し、腰は細くくびれ、底がそろばん玉のように屈曲しています。また、踊るようなポーズをとった人の姿を文様にした土器もあります。石器などを含め176点もの出土品が国の重要文化財に指定されています。

中期後半では、角のような装飾に渦巻き文様を巡らす土器があり、新潟県を中心に出土するかえん火焰土器と対比して、水煙文土器すいえんもんと呼ぶ場合もあります。安道寺遺跡(甲州市塩山)の水煙文土器は特に大型ですが、上野原遺跡(甲府市)の土器のようにコンパクトなものもあります。



殿林遺跡出土の深鉢形土器



一の沢遺跡出土土偶



一の沢遺跡出土



かいどうまえ
海道前C遺跡出土
(北杜市高根町)



安道寺遺跡出土の深鉢形土器



一の沢遺跡出土



一の沢遺跡出土土器の展開写真

9. 縄文人の姿

見学の重点

金生遺跡(北杜市大泉町)から出土した耳飾りをはじめとして、山梨県内各地から発見された垂飾、大珠、玉など縄文人の装身具(アクセサリー)を展示してあります。

- ①縄文人はどのような服装や髪型・化粧をしていたのでしょうか。土偶の顔面の模様などから読み取ってみましょう。
- ②縄文人は耳飾りをどのようにつけたのでしょうか。展示してある耳飾りを観察して、考えてみましょう。

土偶を観察することにより、縄文人の服装や風俗習慣を知ることができます。髪は結び上げて、シカの骨などで作った髪飾りを付け、上着やベストを着て、ズボンと靴を履いていたと想像されています。展示してある金生遺跡出土の土偶はハート形のフリルの付いたパンツのようなものを、坂井遺跡(韮崎市)出土の土偶は腰の部分がかぶらんだズボンのようなものをはいています。そしておそらく衣服はシカやイノシシなどの毛皮や、植物の繊維をむしろのように編んだ布などで作られ、大きな渦巻き模様などで飾られていたことでしょう。特に寒い冬を過ごすのに、毛皮は欠かすことのできないものだったでしょう。縄文人は赤や白の顔料を顔に塗ったりイレズミをしていたと考えられています。縄文時代の遺跡から、首飾り、耳飾りなど様々な装身具(アクセサリー)が発見されています。耳飾りは、埋葬された人骨の側頭部から発見されたり、土偶の耳に耳飾りをした表現があることから、耳たぶに穴をあけてはめこんだと考えられています。子どもの時には魚や小動物の骨、または小型の耳飾りをしていて、成長するに従って大きくしていったようです。前期の古い耳飾りは、環状の玉に一ヶ所切れめを入れた球状耳飾りといわれる石製のものでしたが、中期以降は土製の臼形などの耳飾りが広まっていきました。首飾りは大珠、勾玉、垂飾など石や骨でつくられ、ひもを穴に通して使用したようです。首飾りにはヒスイ製の玉があります。日本列島最古のヒスイ大珠(大きな玉)が、天神遺跡(北杜市大泉町)で出土しています。ヒスイは新潟県糸魚川上流のヒスイ峡で産出するもので、交易によって中部・関東・東北地域ばかりでなく、北海道から南西諸島までもたらされています。腕飾りには二枚貝に穴をあけてつくった貝輪が多く用いられていました。装身具は、身を飾るという意味があっただけでなく、悪霊から身を守るお守り的な意味のほうが強かったようです。縄文人は体にイレズミをしていたと推定されていますが、これも魔除けの意味をもっていました。



天神遺跡出土大珠



三光遺跡出土大珠
(笛吹市御坂町)



花鳥山遺跡出土
球状耳飾り



天神遺跡出土球状耳飾り



大月遺跡出土大珠
(大月市)

金生遺跡出土耳飾り・耳栓

